

なぜ、勉強しなければいけないのか

- 1、 導入
- 2、 不十分な答えの例
- 3、 私見
- 4、 結びにかえて

1. 導入

「なぜ、勉強しなければいけないのか」

本稿の目的はこの問いに対する答えを見つけることにある。ここでいう勉強とは、現在の小中高教育の現場で生徒に課されている一般教科（国語、算数、社会、理科など）を指す。私はこの問いに答えを得られずに苦勞した。親や教師、あるいは学校という制度は当然のように勉強を課す。にも関わらず、私にとってそれはしばしば苦痛を伴うだけでなく、勉強することによって生まれる価値がはっきりと理解できなかったからである。これが今回上記の問いに対しての答えを見つけようと思ったきっかけであり、動機の一つである。

だが、この問いに答える必要が果たしてあるのだろうか。換言すれば、この問いに答えることにどのような意味があるのかということである。それは一言で言うならば、教育を受けるものにとっての動機を与えることだ、と私は答える。

動機は心理学の分野では二種類に分けられる。内発的動機と外発的動機である。外発的動機とは「外から与えられる報酬を求めたり、苦痛を避けたりすることによって生じる欲求」のことである。一方、内発的動機とは「外から与えられる報酬のための手段としてではなく、ある活動をする事自体を自己目的的に求める欲求」である。本稿で扱うのは前者、外発的動機である。

教育の問題の一つとして学習意欲の低下という現象が挙げられ、生徒が興味や関心を持つような授業が望まれている。これは内発的動機を生徒自身に持ってもらうという試みである。

だが、全ての生徒が内発的動機づけにより勉強に取り組むような方法は実現が難しいと私は考えている。内発的動機が起らない者にとって勉強は理由もなく強制させられる不毛な作業にすぎない。そして内発的動機づけを皆が行えるような方法がない限り、上記の問いは必然的に発生するのである。だから、この問いに答えるということは外発的動機を被教育者に与え、そして教育上の一問題を解決するという意味を持っているのである。

本稿を執筆するにあたり、私なりの問いに対する答えは既に出ている。しかし私の答えの前によく聞かれるにもかかわらず、私が満足できなかった答えのいくつかを **Section.2** で検討したい。そしてそれらのどこが不十分であるのかを見極め、その不十分さを補う形で私なりの答えを **Section.3** で提示する。

しかし、私が考える答えも議論の余地があると思われる。であるから、ここで述べる答えを起点とし、より皆が納得できるような答えを議論の中で見つけたいと思っている。では、さっそく答えの例を見ていこう。

2. 不十分な答えの例

i) 将来の生活に困らないようにするためだ！

この答えの趣旨は勉強すれば偏差値の高い大学に行くことができ、偏差値の高い大学に行けば高収入とは必ずしも言えないがそれなりに収入の安定した職に就くことができる、というものである。確かに、貨幣経済において生活するための金銭は必要であるし、一定水準以上の物質的豊かさは誰もが望むものである。そして、自分たちの社会が不景気になればなるほどこの種の答えは説得力を持つのである。

しかし、この答えを突き詰めていくと「お金のために勉強しなさい」ということになる。もちろんそのような教育でも構わないのだが、子供の将来の金銭のために教師が国語や理科を教えるというのは違和感を覚えざるを得ない。さらに、将来の収入安定のためであるならば高収入といわれる職業になるための専門知識を理科などの代わりに教えればよい。一般教科を教える必要がなくなってしまうのである。

ii) 自分の将来に幅を持たせるためだ！

基本的なスタンスは i) と大差はないが、勉強がお金のためではなく、自分の将来の可能性を広げるためだという答えである。例えば、理科を勉強していれば天気分野に興味を持ち、気象予報士になりたいと思うかもしれない。また、ある有名な企業で働きたいと思ったときに偏差値の高い大学を出ていることは多少なりとも有利に働くだろう。

i) の問題点であった一般教科を学ぶ必要も唱えることができる。このように勉強に対する積極的な動機を与えることはできないにしろ、勉強しておいて損はしないと考えるのがこの答えである。

しかし、この答えには致命的な欠点がある。幅を持たせる必要の無い者、つまり自分が将来どのような職に就きたいかを決めた者に対しては意味をもたないのである。「将来は画家になりたい」という生徒に対してはこの答えは何の説得力もない。勉強が嫌いだから絵を描いているという生徒を正当化することにもなりかねないのである。

iii) 学校で学ぶ一般教科は社会で役に立つからだ！

今は他の国とも交流が進んでいるから英語は使える海外旅行がスムーズだという実践的なものから、数学の考え方は物事を考える際に役に立つという思考法的なものまである、社会で役に立つというのだから学ぶことに意味があるとする答えである。確かに実践的には買い物をする際に算数を知らなければだまされることもあるし、漢字が理解できないと書類を読むにも時間がかかる。不便さはこの上ない。

だが、実践的なものはさておき、数学の考え方が本当に役に立つのかを証明するのは困難であり、役に立った経験者の話を頼りに推測するしかなく説得力に欠けてしまう。また、歴史で暗記した用語が本当に社会で（小学校の科目では「社会」となっているにも関わらず）役に立つかどうかは疑わしいものである。

iv) 勉強する必要などない！自分の好きなことをやれ！

学校で習う勉強などやっても大して役には立たないのだから、という考えがこの答えには多分に含まれている。それよりも自分の好きなことをやって、その技能を伸ばせということである。「幼い頃から野球が好きで」勉強より野球をしている子の何人かは将来優れた選手になるかもしれない。

しかしながら、「好きなこと」が一般人から見て役に立つとは到底言えないようなものだったらどうだろうか。「寝ることが好き」「何もしないことが好き」な人はその極端な例である。勉強の代わりにそれらの行為をさせることが望ましいのだろうか。教師が勉強などする必要がないと生徒全員に言ってしまえば、学校制度そのものが意味をなくしてしまうのである。

このようにどの答えを取ってみても問題点がある以上、これらは不十分な答えであるといえる。では、これらの答えの不十分さを補う私の答えを提示しよう。ただ、問いに答えるその前に、小浜逸郎氏の思考方法に従って問いそのものの分析を試みたい。彼の考えによれば、問いに対して答えることに行き詰るのは「問い方」そのものに問題がある場合があるからである。（『なぜ人を殺してはいけないのか』 はじめに）よって以下では冒頭の問いを丁寧に分析することから始め、問い方に問題があればその真に意図することを汲み取り、別の問い方に置き換えるという作業を行う。

では、「問い」そのものを問うてみよう。

3. 私見

I、「問い」を問う

「なぜ？」という問いが求めているものは何か。それは理由である。ではこの場合、理由を与えるものとは何か。実はこのような問い方では理由を与えるものをひとつに定めることはできない。この問いに対しては2つの理由の与え方が存在してしまうからである。一つは一般教科を課す側から、もう一つは一般教科を課される側が見出す理由である。私はこの問いに答えるにあたり前者を①組織目的理由、後者を②動機的理由と呼びたい。

であるから、問いは①を問う問いと②を問う問いの2つに分ける必要がある。①の問いは教育を課す者たちが勉強を課す目的を問うものであるから次のように言い換えることができるだろう。

「教育者たちはなんのために一般教科を課しているのか」…①

また、②の方はさらに2つに分けることができる。こちらの方は勉強を課される側にとっての動機である。この動機は報酬を求める動機（利益）と従わなければならない必要性の動機（義務）に分割される。よって②は次のように置き換えられる。

「教育者たちが課す勉強に従う義務はあるか。その根拠は何か」…②— α

「勉強して得られる利益が被教育側にあるか。あるとすればそれは何か」…②— β

そしてこの問いが発生したのは一般科目を学ぶことに意味を見出せない者に外発的動機を与えることにあったのだから、②に答えれば冒頭の問いに答えたことになる。しかし、ここはあえて①に答えてから②の答えを考えることにしよう。なぜなら①と②— α の問いは関連性があり、①の答えが②の答えを導くものになっているからである。

II、なぜ、勉強しなければいけないのか

a) ①に対する答え

この問いに答えるために、再び小浜氏の著作から勉強を課す目的について触れている部分を引用してみよう。

「私たちはなぜ、国語、算数、理科、社会などという科目を作って、それらを義務教育のなかに組み込んできたのでしょうか。…(中略)…これらによって象徴される能力が、私たちの社会や文明そのものをささえてきたからです。私たちは自分が生きている社会のなかから、こういう能力はどうしても必要とされるはずだという像（確信）を作り上げ…それを便宜上いくつかの科目に分けているにすぎません。」（『頭はよくなるらない』49頁）

だから、我々の社会が根底からひっくり返らぬ限りこれらの科目と社会で生きていくうえで必要とされるもの間に対応関係が存在するのである。そして私たちは自分たちの社会に必要なことを次の世代へ継承させる。継承させなければならないのはなぜか。それは自分たちの属する社会を維持するだけでなく、経済的、技術的、政治的な発展を促すという目的があるからである。よって①の問いに対しては次のように答えることができるだろう。

「自分たちの属する社会にとって必要なことを、対応関係にある一般科目として課すことでその社会の維持・発展をはかるため」

b) ②- α に対する答え

この問いに対する答えは①の答えによって導かれる。上に述べたように必要とされる文化の継承は義務として我々に課されるのである。ここで重要なのは義務があるのは大人（成人）たちの方のみにあるということである。これは憲法 26 条 2 項にもはっきりと示されている。つまり②- α に対する答えは次のようになる。

「勉強を課す大人には文化を次の世代に継承させる義務が課されるが、勉強を課される子どもに勉強をする義務は存在しない」

c) ②- β に対する答え

最後にこの問いに答えることにしよう。その前にまず教育心理学者である市川伸一氏の学習動機の二要因モデルを紹介したい。このモデルによると学習動機は外発・内発的区分よりもさらに細かく分けることができる。（『学ぶ意欲の心理学』48 頁）ここでは典型的な内発的動機である充実志向動機を除けば全ての型（報酬志向、実用志向、自尊志向、訓練志向、関係志向）において外発的動機が多かれ少なかれ関わってくる。

なぜ、このモデルを紹介したのか。それは先に述べた動機を与える利益が人によって異なるからである。各人が最も望む利益が違う以上、その人が何を欲しているのかを考えなければある人にとっては利益となっても他の人には利益とならないからである。ではこれらのモデルの一つ一つの型に対して勉強から受ける利益を考えてみよう。

まずは報酬志向型。このタイプが求めるものは勉強の内容とは分離された利益であるから Section.1 の i) で示したような将来の収入、あるいはそれによって得られる権力である。次に実用志向型。これは Section.1 の iii) で示したような勉強によって得られる、自身が属する社会の中で役に立つ技能や能力のことである。一般科目と社会で必要とされるものとの対応関係については①に対する答えの部分ですでに述べているので参照されたい。

自尊志向型と訓練志向型については述べるまでもないだろう。勉強をすれば間違いなく頭の訓練になるし、科目ごとに課される試験や模試でよい点数をとることで自尊心は養われる。そして関係志向型。他人との関係を利益として求めるのだから、共に学ぶ者や教師との関係を作る過程において共通知識や体験は必須のものであり、それらを身につけるために一般科目の知識もまた、必要である。

以上で②-βの問いには一応答えたことになる。だが、この問いに答える際に問いを發した者がどのタイプなのかを識別し、それに応じて5種類の答えを出すというのは一貫性に欠けるとも言えるだろう。また、Section.2で示した答えの例が持つ問題点の解決が完全に達成されてはいないことにお気づきの読者も多いことだろう。これらの意見に対して私は5つのタイプに一貫性を持ち、かつ不十分な答えの全てを補う形で「なぜ、勉強しなければならないのか」の問いの答えを最後に示そう。用いるのは唯脳論的な視点である。

Ⅲ、なぜ、勉強しなければならないのか ～ 唯脳論的視点 ～

唯脳論的な視点であれば上記5つのタイプが求める利益全てを脳に還元させることが可能である。①の問いに対する答えでは社会を維持・発展させるために勉強は課されるのだと言った。そのことを考えれば、なぜ報酬志向型が求めるような利益が勉強をすることによって得られるのかが理解できる。社会を維持・発展させていくのは優れた脳を持つ人物であり、貨幣や権力は優れた脳を作り出すための報酬装置だからである。報酬志向型が求める利益は脳を発達させることによって得られるのである。

また、社会での勉強が本当に社会で役立つのかという疑問に対して証明することは難しいと私は言った。しかし、周りを見渡せば分かるように現代の我々は多種多様な人工物に囲まれている。物質だけでなく、制度や概念などもその中には含まれる。人が作ったものは人の脳が作り出したものに等しい。であるから勉強の内容が社会と対応関係を持つこと、そして勉強の内容が何らかの形で社会を動かす技術となって役に立つのは疑いようがない。社会そのものを形成するのは脳であり、その脳を作る基盤は教育によって形成されるからである。そして、これらの基盤はどのような状況でも必要とされるものであるから、どのような職に就いている人にとっても勉強によって培われる力を持っていることは自身にとって有利に働くのである。

訓練志向型においては説明不要だろう。知的訓練とは脳を鍛えることと同義である。自尊志向型の求める利益も脳に還元される。「頭がいい」「いい人材」などの褒め言葉はまさしくその人の脳を褒める言葉だからである。他人志向型の場合はどうか。これもⅡで述べたような共通基盤となるような知識や思考法を築くのは脳であり、それらがなければ他者が何を思い、何を考えているのかを理解することはできない。

以上により、「なぜ、勉強しなければならないのか」という問いには（正確に言うなら動機的理由を欲しがって発せられるこの問いには）1つの答えを示すことが可能である。

このように問いかけられたら私は答えるだろう。「きみが何を欲しがっているのかは分からないけれど大人になって社会で生きていく以上、一定の知識、思考方式を持っていることはどうしても必要だ。それはきみの脳の性能を上げることが必要で、その脳を形成する最も代表的なものが学校の勉強なんだ。きみが社の中でしたいこと、やりたいことを持っているのなら、勉強はきみのやりたいこと、したいことを実現しやすくしてくれる。きみたちが自分の望みを実現させるために勉強しておくことが多くから勉強するんだよ」、と。

4. 結びにかえて

「なぜ、勉強しなければならないのか」

この問いに答える統一的な答えは存在しない。少なくとも問いを發した者の希望に沿うような答えはない。なぜなら、これらの問いを發する多くの者が勉強というものに嫌悪感を抱き、それでも勉強しなければならない現状をなんとかしようとして外発的な動機を知ろうとしている。そして外発的動機は個々人の価値観に委ねられるからである。

この問いに統一的な答えを与えようとすればⅡ-a)の答えが導かれる。しかし、これは外発的動機を与えるものではない。だから外発的動機を見つけようとする物は自分で勉強に外発的動機を見出さねばならないのである。そこに絶対的な答えなどありはしない。

だから、「なぜ、勉強しなければならないのか」という答えの問いには自分で答えを見なければならぬという、なんとも月並みで納得のいかない結論が導かれる。その納得のいかなさに対抗するような形で出されたのが本稿の答えである。しかし、問題点も残されている。最後にそれらを紹介しよう。

まず、関係志向型の人に対して本稿の答えはあまり説得力をもたないことがある。ただ他人を求めるだけなら「勉強しない」ということが他者との共通基盤となることが多いにありうるからである。また、社会が脳によって作られているというのも理解はできるが実感を得ることが難しく、動機となりにくいのである。

他にも不十分な点があることだろう。だが、本稿の目的は確かに冒頭の問いに答えることであるが、本勉強会の目的は私の考えを起点としてこの問いに対するもっと良い答えはないかを模索することにある。あとは議論へと場を移すことにしたい。私としてもこの問いに対する答えを脳に求めるといふ非人情的なもので終えたくはないと思う。